

## 生物系

# 領域横断的エンド・オブ・ライフケア看護学の構築

看護学研究科・特任教授 長江 弘子



### 研究の背景

わが国の終末期医療の臨床現場では、がん患者の高齢化があり、しかも高齢化の中で慢性腎不全、慢性呼吸不全などの慢性疾患が増加し、さらにはパーキンソン病や神経難病、進行性の認知症などの穏やかに機能低下していく病態の増加など、終末期医療と高齢者医療とが多重に複雑に絡み合う長期的な病状と生活の管理を必要としています。それゆえ、その人の人生の質と医療の価値という観点から「その人にとっての最善の医療やケアとは何か」を考えることが課題となっています。

このような多様な疾患の終末期の在り方を模索する動きを反映して「エンド・オブ・ライフケア」（終末期・晩年期のケア）という新しい考え方が生まれています。なぜなら、従来の「緩和ケア」や「ターミナルケア」では説明できない、生と死に直面する人々のケアを長い人生の中で最期までどう生きるかを支えるあり方を、患者とその家族と共に、深く考えなければならないからです。

そこで私たちは人々が豊かな終末期を生きることができるよう支援するあり方とその背景となる考え方を整理し、日本の生活文化に即したわが国独自のケアモデルを構築すること、看護学として看護実践に還元できるよう看護基礎教育や臨床現場の人材育成に取り組んでいます。

### 研究の成果

まずは本学の普遍教育で「生きるを考える」、看護学研究科では学部と大学院で開講しました。次にエンド・オブ・ライフケアの概念開発に取り組み、「診断名、健康状態、年齢に関わらず、差し迫った死、あるいはいつかは来る死について考える人が、生が終わる時まで最善の生を生きることができるよう支援すること」であると定義しました<sup>1)</sup>。さらに、地域社会でエンド・オブ・ライフケアを推進していくためには、市民とも課題を共有することが必要です。そこで市民公開講座を実施し、その内容を記録集として発行し（写真）人々が自分の生の一部としてエンド・オブ・ライフについて考え、周囲の人、大切な人と語り合うことを推奨しています。



### 今後の展望

我が国の人々が望む終末期の在り様を明らかにした上で市民と専門家への教育プログラムを学際的チームで協働開発し、千葉大学において終末期ケアを担う人材育成拠点を形成したいと考えています。

#### 【支援を受けた科研費等】

- 平成23～27年度 日本財団委託助成事業「領域横断的エンド・オブ・ライフケア看護学の構築」
- 平成22～24年度 挑戦的萌芽 「非がん患者・家族の在宅緩和ケアにおける看護実践のベストプラクティスとその効果検証」
- 平成22～25年度 基盤研究 (B) 「生活と医療を統合する継続看護マネジメント能力を育成する教育プログラムの開発と検証」

#### 【備考欄】

- 1) Izumi S, Nagae H, Sakurai C, Imamura E: Defining end-of-life care from the perspectives of nursing ethics, *Nursing Ethics*, 19(5), 608-618, 2012.
- 2) Nagae.H., Tanigaki S., Okada M., et al: Identifying structure and aspects that “continuing nursing care” used in discharge support from hospital to home care in Japan, *International Journal of Nursing Practice*, 19, 2013. (In press)